

## 会長挨拶

渋谷 武

(新潟大学名誉教授)

21世紀まであと5年となった。20世紀は一つの角度からみれば、大量殺戮と破壊の世紀であったと言える。それは、人類の大量殺戮にとどまらない。大規模な破壊は、開発の名の下に、自然環境の破壊に及び、植物、動物の大量殺戮、種の絶滅までももたらした。仏教のいわゆる六生類への殺生が、これほど大規模に行われた世紀はなかったであろう。それは、二つの世界大戦の結果だけではない。米ソ超大国の間に進んだ東西対立、冷戦構造の中で、核兵器の開発競争と其の運搬輸送手段の開発に伴う宇宙空間での激しい競争は、人類にその使用が地球絶滅への道という、大きな脅威を与えたが、一方では、対人地雷、生物兵器、化学兵器によって、核兵器とは別の個別的でありつつ、大量の殺戮と自然破壊、文明の破壊を進行させてきた。さらに高度の科学・技術の悪用の結果としての新しい各種科学兵器は、その破壊力を著しく強化化してきている。

1945年以降、紛争、飢餓による死者の数は二つの世界大戦における死者の数をはるかに上廻っていることを直視しなければならない。東西冷戦構造の終結は、このような状況の改善に有利に展開すると考えられ、東西両超大国の対決の中に生まれた、対立と緊張の境界線上にあったこの環日本海地域に、一つの期待感を与えてきた。長い間、中心の繁栄から取り残されていたが故に、開発から取り残された資源を豊富に有するこの地域の開発に伴う地域繁栄の夢がかき立てられたことは否めない。

我々の学会が発足したのは、このような状況の中であった。周辺・辺境からの離脱は、この地域の悲願である。その悲願が達成されるための方策は、緊急課題であることは否めない。しかし、急ぐあまり、荒廃への道を歩んではならない。中心の繁栄の蔭で、過疎と、貧困に悩まされた周辺の悲哀から、脱出しようとすることを急ぐあまり、資源開発の進行の結果として、その後自然破壊と荒廃が残った、周辺の各地の現状を、我々の教訓としなければならない。

環日本海学会の課題は、この地域の過去、現在を冷静に分析整理するとともに、未来への展望を形成することにある。それは単にこの地域の未来だけの問題としてではなく、地球全体が現在悩んでいる飢餓・貧困、自然破壊の現状から脱出できる方策のモデルをこの地域で創り上げ、それを地球全体に発信する作業拠点にならなければならないことを示している。それは、けだし、相互の尊厳を確認することに始まり、相互信頼、相互扶助、相互協力の体系を創造し、ただ単にともに生きる「共生」から一歩進め、それぞれがそれぞれに独自の生活文化をより豊かに展開すると同時に、地域全体の均衡ある、調和のとれた発展・繁栄を目指す、「協生」の社会をつくり、それをモデルとして、地球全体にこの「協生」の社会の構想を発信するものでなければならない。

我々の会員は、多様な問題意識、多様な視点、視角に基づく、多様な対象に対する観察とその集約及び成果をあげてきた人々である。今、共通のテーブルにつくことによって相互の経験と成

果を交流しあい、互いの批判・検討を交換しあい、それをもとに、それぞれに新しい視点、視角を創生しあうことが目指される。多様な異質の意見の噴出と、その交換こそ、人類に新しい視座と新しい選択領域を提供する基礎となるものである。新しい選択領域の拡大が、大量殺戮と大量破壊への道であった20世紀とは異なり、相互人格の尊重と協調・協力の拡大する「平和」、「協生」の21世紀を迎える基礎となるために、われわれの学会は、堅実な歩みを進めたいものである。

時は、1995年である。カントの『永遠平和のために』が公刊されて200年にあたる。カントは自然状態を「敵対行為によって、絶えず、脅かされている状態」と見た。それ故、「平和状態は創設されなければならない」と説いた。かれの著作以来、200年、人類は平和状態の創設に失敗を繰り返しただけでなく、地球の終末に導く、大量破壊・殺戮の兵器によって、恐怖と憎悪を拡大し、敵対行為の原因、手段を増幅こそすれ、平和状態への道から遥かに遠い道を歩むことになっている。

我々は排他的な人間の本性を転換する方途を求めなければならない。その鍵となるものは、他者の存在の確認と、その他者の恩恵の確認、感謝と報恩、奉仕の精神の確立と考えられる。人と人、人と「もの」、人と自然との間の友愛関係・協調関係の創設こそ、21世紀への中心課題となるであろう。それは人権の問題であり、環境の問題に深く関わる問題となる。この課題に挑戦することこそ、我々の学会の課題である。